

## 【講演会記録】

# 体験的安全保障論

磯部 晃 一

## 目 次

1. はじめに
2. 挨拶（的射場敬一政治研究所所長）
3. 講演（磯部晃一元陸将）

### 1. はじめに

2021年は、東日本大震災が発生してから10年目に当たる節目の年であった。このことより、東日本大震災時に実施された、自衛隊と米軍によるトモダチ作戦に関わられたご経験のある磯部晃一元陸将をお招きし、2021年10月21日1限（9時～10時30分）に、政治研究所主催の講演会を実施した（国土舘大学世田谷キャンパスメイプルセンチュリーホール（MCH）大教室で開催）。当日は、トモダチ作戦を含めて、磯部元陸将の大学時代からご退官されるまでのご経験を振り返って頂くと共に、日本の安全保障政策に関するお考えを披露して頂いた。

磯部元陸将は、1980年に防衛大学校（国際関係論専攻）を卒業後、陸上自衛隊に入隊され、第9飛行隊長、陸上幕僚監部防衛課長、統合幕僚監部防衛計画部長、第7師団長、統合幕僚副長などを歴任され、2015年東部方面総監を最後に退官された。その間、アメリカ海兵隊大学およびアメリカ国防大学にて修士号を取得された他、退官後、ハーバード大学上席研究員として研究した成果を『トモダチ作戦の最前線：福島原発事故に見る日米同盟連携の教訓』（彩流社、2019年）として出版され、日本防衛学会猪木正道賞（特別賞）を受賞

されたご経験もある方である。このように、長きに渡って自衛隊の中核で活躍されたのみならず、学術的にも優れた成果を残された磯部元陸将のご講演は大変素晴らしく、貴重な機会であった。

今回の講演会は、主に「日本の安全保障」授業の受講者に対して行われた。日本の安全保障という、ともすれば学生にとって、なかなか身近に感じにくいテーマが題材であること、また、受講者の中には自衛官を目指す学生もいることから、トモダチ作戦のような一つのテーマに関する詳しい専門的なお話というよりも、磯部元陸将の歩みに焦点を当て、大学時代から退官されるまでを振り返る形でお話をして頂きたいと事前にリクエストを行った。磯部元陸将は、快く応じて下さり、当日のご講演は、トモダチ作戦のみならず、自衛隊の国連平和維持活動（PKO）への参加、同時多発テロ事件発生時の米国での経験など多岐に渡るものであった。このように、講演内容が大変興味深いものであっただけでなく、磯部元陸将の熱のこもったお話ぶりに、多くの聴衆が惹きつけられていたことが大変印象的な講演会であった。

以下、磯部元陸将による講演内容に加えて、的射場敬一政治研究所所長による冒頭の挨拶も記すことにする。その理由は、磯部元陸将の講演にその内容が含まれたこと、そして何よりも、記録として残すべき、心に残る素晴らしい挨拶であったからである。

（板山 真弓）

## 2. 挨拶（的射場敬一所長）

おはようございます。政治研究所第一回講演会を、磯部先生をお招きして開催させていただきます。板山先生の講義の時間帯ですが、政治研究所の講演会という形で実施します。

この講演会は、板山先生が、磯部先生を熱心に口説いていただき、また学生のためにと色々なコーディネートをして下さいました。講演会が始まると分



かと思うのですが、磯部先生は、本当に貴重な経験をされている先生です。滅多に聞けないお話を聞くことができると思います。そういう意味で、すごく有意義な講演会になると思います。

しかし、硬苦しく考えないで、気楽に肩の力を抜いて聞いて下さい。若い時に聞いたことは、たとえ聞き流していても心の中に沈殿します。だから、そんなに生真面目に捉えないでも大丈夫です。今日、磯部先生に聞いたことが、30代、40代で知恵を出さなければならない時に、心の底から浮き上がってくると思います。

それでは、磯部先生、どうぞ宜しくお願いします。

### 3. 講演（磯部晃一元陸将）



皆さん、おはようございます。今、ご紹介頂きました磯部でございます。

的射場先生のお言葉を聞きながら思ったのですが、学生時代に聞いた話というのは、後で振り返ると非常に勉強になるんですね。私は学生時代に聞いた講演や講義のノート等を残しておりまして、そ

の中に隠されたヒントや真実があるんですね。先程おっしゃられたように、自分はその時は聞き流したつもりでも、実は‘沈殿’しているというのは、まさにその通りだと思います。

今日は1時間半、私の40年くらいの歴史を振り返って、その要点をいくつかお話したいと思います。

#### <セッション1：生い立ち～学生時代>

今では髪もすっかり白くなりましたが、この小さい時の写真は髪の毛が黒いですね。持っているのはUS NAVYの飛行機、艦載機なんですよ。当時から

ら自衛官になりたかったのかもしれませんが。

防大は全寮制で、1年の時は、外出に許可が必要です。また、外泊はできず、沢山制限がありました。今は多少緩くなっているかもしれませんが。また、学生の中には階級があって、4年生は王様、3年生は貴族、2年生は平民、1年生は奴隷というヒエラルキーです。今では怒られてしまいますけど、そんな感じでした。

私は防大に入りまして、いろんなことをしました。こちらの写真は、何をしているのかというと、短艇（カッター）の練習風景です。あちらに立っている人は3年生で、漕いでいるのは2年生です。私は右下に写っていて、一生懸命長いオールを漕いでいます。防大では、3年までは厳しい関門となる訓練があります。4年生もあるんですけど、それで1年生は何をするのかというと、夏休み前に遠泳で8キロ泳ぎます。皆さんご存じかどうか分かりませんが、観音崎という三浦半島の東端近くに走水海水浴場があるんですね。その沖合に猿島があるんですけど、そこに向かって泳いで往復します。往復で8キロあるから6時間ぐらい泳ぎっぱなしです。やはり泳げない人もいるので、その場合は半分泳ぐとか、赤い帽子をかぶって別にします。

2年生では、短艇の競技会があるんですね。それぞれの所属する寮の単位で、ボートを出して競争するわけです。3年生ではクロスカントリー、いわゆる自衛隊の服装で半長靴をはいて、リュックを背負って4キロぐらい走って競争するんですね。まあこんな事ばかりやっていたかというと、全然勉強してないじゃないと思われるかもしれませんが、勉強しながらこのようなことをしていました。また、学生時代に、私はグライダー部に入っていました。自衛隊になったらパイロットになりたいなと思い、頑張っていました。

次に4年生の写真ですが、自分で出すのは恥ずかしいのですが、今の妻です。40数年前の。防衛大学校では卒業ダンスパーティーをおこなうのですが、当時は女子防衛大生がいなかったんです。男子だけの学校だったので、このダンスパーティーで、女性のパートナーを探してくるのがなかなか大変だった。私は、たまたまご縁があって、こういう形でお付き合いして、結婚まで行ったんですけど。こんな感じで4年間を過ごしました。

<質疑応答>

Q：奥様と知り合ったきっかけは？

A：クラブ活動がありまして、体育会系のクラブは必ず一つは入らなければなりません。それでグライダー部に入ったんですけど、文化系のクラブもあるんです。私は英語が好きだったというか、英語を学びたいという夢がありまして、ESSに入ったんです。神奈川六大学リーグのようなものがありまして、そのESSのつながりで知り合ったのが、今の妻ですね。

Q：学生時代に熱中したことは何ですか？

A：グライダー部ですね。グライダー部は何をするかということ、平日は機体の整備や組立・分解以外にあまりすることがないんです。することがないというか、駆け足ばかりだったんです。なぜ駆け足をするかということ、週末に木更津にグライダーを運んで行って、そこで飛ぶんですよ。木更津に、陸上自衛隊の飛行場があります。ちょうど東京湾を渡った先にありますから、そこが一番近い自衛隊の飛行場です。グライダーは動力装置がないですから、降りた後、滑走して止まるときに、翼端部がどちらかに倒れるんですね。それをつかみに行かなくてはいけない。そのために走る訓練をするんですけど、平日はそのために一生懸命走ってて、週末はずっと飛んでるんです。私も、1年から3年まで、こんな事ばかりしていて、彼女は見つかるのかなと思ったんですけど。まあ、そんな感じで、休みは全然ありません。ですから、週末はフライト、平日は授業が終わったら駆け足、そんな感じです。

Q：自衛官になるには、学生時代に何をしておけばよいのでしょうか？就職して気づいた学生のうちに身につけておけばよかったことなどはありますか？

A：学生時代は謳歌しているんじゃないですか。自衛官になったら、あとは頑張るしかない。ですから、体力と気力は必要です。当然ながら、基本的にすぐ回復するような体力を作っておけば大丈夫だと思います。

## <セッション2：自衛官としてのお仕事>

私は、自衛官として、35年勤務しました。皆さんは21世紀世代で、2000年頃生まれたんですよ。私は1958年生まれで1980年に自衛隊に入りました。そこでは、10年毎に、いろいろなことがありました。

最初の6年間は仙台の飛行隊で勤務していました。陸上自衛隊は、実は飛行機を持っています。地べたで戦闘しているだけでなく、ヘリコプターや固定翼も一部持っているのです。私は、ヘリコプターのパイロットとして、仙台で勤務していました。

その後は、幹部学校に入校しました。指揮幕僚課程と書いてありますが、これは旧軍で言えば陸軍大学という、幹部自衛官の中でも選抜試験を受けて合格した人しか入れないエリートコースみたいなところに入って、その学校で2年間勉強をしていました。

その後は、私も驚いたのですが、外務省に出向になります。この当時から、外交と防衛の連携がありました。外務省は、自衛官の知識が欲しいということで、私が外務省北米局日本安全保障課に1989年から1991年まで出向したのです。ちょうどその間に、冷戦が終わりました。冷戦と言われてもピンとこないかもしれませんが、今のロシア（旧ソ連）とアメリカが対立していた冷たい対立の時代が終わったということです。

その辺りから私の人生が変わっていきます。1990年に、幹部学校にいた時に書いた論文が出版されました。これは「平和維持活動の軍事的意義に関する考察」という研究論文です。学内の機関誌に載せて頂いたのですが、この論文がのちに国会で問題になり、反響を呼んでしまいます。外務省に出向してちょうど1年弱たった頃、国連政策局の人が、私の論文を読んで、一緒に北欧のPKOセンターに行ってみませんかと誘ってくれました。私が書いた論文というのは、当時、自衛隊が海外派遣するのはけしからんという時代ですので、論文指導の先生も、こんな論文を書いてはダメだ、自衛隊は任務にないことをやってはいけないんだとおっしゃって、ボツになりそうになりました。しかし、私はそんなことないだろうと、将来には必ず自衛隊にもPKOに参加する時代

が来るんじゃないかと思って、ある先生に聞いたら「面白そうだから、俺がひきとってやる」と言ってくださり、論文を出すことができました。それで、外務省の国連政策局の人が論文を読んで、「面白い人がある」ということで、「一緒に行こう」と誘ってくれたんですね。

この写真に写っている真ん中の方が、加賀美秀夫国連大使です。大使以下、北欧PKOセンター調査団として4カ国を訪問しました。この右下の方は、当時のソ連軍の人です。ソ連軍は、当時我々の‘潜在的敵’ですから、初めてソ連軍人と面と向かった時は緊張したことを覚えています。そういう時代でした。

この後、ノルウェーのPKOセンターにも行きました。若い兵隊さんが、仲間同士で血液を採る練習をしているんですよ。日本には医事法がありますから、こういうことはできません。しかし、ノルウェーなどの軍隊にはそういう権限を平素から軍隊に渡しているんですよ。その辺が、自衛隊と外国の軍隊との違いです。色々な面で権限の違いが明確にあるという事です。

その後、PKO視察団のミッションを終えて一行と分かれて、私は単身、ドイツに飛びました。ここからは安保課の仕事です。冷戦が崩れようとしている時期に東西ベルリンがどのような状況になっているのか自分の目で確かめて報告することがミッションでした。この写真は、有名な「チェックポイント・チャーリー」です。学生さんで知っている人は、恐らくいないでしょう。どこにあったかというと、ベルリンなんです。冷戦時代、ベルリンは旧東ドイツの領内にあったのですが、そこだけは東西の陣営に分かれて西ドイツのエリアがポツンとあったんですね。ベルリンの中の、さらにその東西をまたぐポイントに検問所があったんです。私が行ったときには、これが完全になくなっていました。この写真では、上の方にサーチライトがあるじゃないですか。これはベルリンの壁が壊れた後に撮ったのですが、東ドイツは、監視所からサーチライトを照らして、西側に逃げる市民を撃ち殺していました。これは、その近くで撮った写真ですけれども、後ろの石碑は、1963年11月4日、そして4月16日に射殺された東ベルリンの市民の名前を刻んだものです。これを見て東西冷戦の厳しさをすごく実感したのが、1990年のことでした。

このような PKO 調査団の仕事を終えて帰国した 2～3 カ月後、イラクのサダム・フセイン大統領がクウェートに突如侵攻して第一次湾岸危機が起きました。日本はものすごくショックを受けたのですが、その時、私は北米局にいました。アメリカに支援をしなくてはいけないということで、対米支援チーム長の岡本行夫北米一課長の下、サウジアラビアに派遣される米軍の支援を検討しました。この湾岸危機が最初に体験した米国との最初の大きな調整場面でした。（※岡本行夫さんはコロナ禍の中、2020 年 4 月にお亡くなりになりました。岡本さんの遺著『危機の外交 岡本行夫自伝』第 4 章に対米支援チームについて触れられています。）

その時期に、『朝日ジャーナル』という進歩的な週刊誌に、私の論文が引用されました。そこでは「泥縄派遣は嫌だ」と言っているように書かれて、それが 1991 年 2 月の衆議院予算委員会で取り上げられました。外務省安保課の国会担当部員から、「磯部さん、あの論文を早く国会に送って」と言われて、「何のことやら」と思ったのですが、どうやら国会で、野党が自分の論文をけしからんと追及しているということでした。その時、私は論文を持っていなかったもので、防衛庁に行って送ったりしました。そのような事件があったので、「クビになるな」と思いました。そこで、辞表を胸に、安保課のナンバーツーである首席のところに行き、「大変ご迷惑をかけました。国会で問題になって申し訳ありません」と言いました。すると、首席は、私の論文を読んでおられていて、「磯部さん、これは問題ない。大丈夫だ」とはっきりおっしゃったんです。それで救われたというか、「ああ、よかったなあ」と思いました。

このように国会で問題になった 91 年の夏に、私は自衛隊に戻り、陸上自衛隊の本部である陸上幕僚監部に勤務することになりました。そこに行ったら、「今度、カンボジアに陸上自衛隊を派遣することになったが、君が担当だ」と言われました。あの研究論文を書いたからということでした。このカンボジア部隊の事前調整に、陸上自衛隊の作戦運用の責任者だった宮本敏明防衛部長と内局の畠山蕃防衛局長が行くことになり、私は担当として随行しました。自衛官としてカンボジアに入ったのは、私たちが初めてでした。PKO の司令部は



国連暫定統治機構（UNTAC）だったのですが、当時は明石康さんがトップでした。明石さんは、日本出身で、国連事務次長まで昇りつめられた方です。明石さんは、私どもの顔を見て、感慨無量の笑みを浮かべて、陸上自衛隊の施設部隊がPKO部隊としてカンボジアに来ることを大歓迎してくれました。私は、UNTAC司令部の各部署をまわって今度、陸上自衛隊が派遣されるので、しっかり頼むということを伝えに行きました。その時の写真がこれです。インドとパキスタンの陸軍少佐と中佐も写っています。

そのあとの1990年代には、私は陸幕の幕僚、いわゆるスタッフの仕事をおこなったり、アメリカ海兵隊の大学に留学させてもらったり、飛行隊長を務めたりして2000年を迎えました。この頃、防衛庁は六本木にありましたが、六本木で下積み勤務をしました。言ってみれば、若い官僚みたいな勤務でした。

それで、次に起こったのが、皆さんの生まれる少し前くらいでしょうか、2001年の9.11アメリカ同時多発テロです。私は、この時、自衛隊の制服を着て飛行機に乗っていました。ロサンゼルス行き日本航空62便です。272名の隊員を連れて、成田空港を13時10分に出発する予定が、雷の影響で遅れて17時頃出ました。飛行機に乗って、日付変更線を越える頃にはウトウトしていました。すると、随行員が「起きてください」と言うんですね。「どうしたの?」って言ったら、「機長がこれから大事なアナウンスをするらしいので、是非聞いておいてください」と言われました。その時は、「機内で急病人でも出たのかな」と思って、周りを見まわしましたが、静かで不思議に思っていました。すると、10分くらい経って、機長からアナウンスがありました。それは、「アメリカ連邦航空局は、アメリカで事件が起きたのでアメリカ全土の空港を封鎖しました。つきましては、この飛行機はロサンゼルスに着陸いたしません。ハワイのホノルル、カナダのバンクーバーもしくは成田に帰ります」というような話でした。私は制服を着て、何をするためにアメリカに行っていたかという、西海岸の北の方にワシントン州というところがあります。そこに、陸上自衛隊が実弾射撃訓練をおこなう場所があるんですね。40キロ四方の広い演習場で、最大射程でロケットやミサイルが撃てる場所ですけれど、そこで実弾射撃

訓練をするために隊員を連れて行っていったんです。もうシアトルに装備品は陸揚げされていました。ですので、ホノルルに降りたらマズいなど。装備はシアトル、人はホノルル、これはだめだ、最悪だ。もし、成田に戻ったら、リセットしてもう一回トライすればいい。カナダのバンクーバーに降りたら、まあ何とか近いので、国境を渡っていけるかと考えました。こちらは、バンクーバーに着陸した時の映像なのですが、ジャンボ機がザーっと並んでいます。アジア各地から出発したアメリカ行きの飛行機は、皆バンクーバーに降りたんです。

アジアからの飛行機がバンクーバーに沢山集結していたため、飛行機から降りるまでに5時間くらいかかりました。空港にはカナダの軍と警察が緊迫した面持ちで銃を持って巡察しており、アジアから来た人々で大混乱していました。その中に、我々自衛官272名が降りたため、とても目立ちました。私は、責任者でしたので、その場を掌握し、まず、トイレ以外は動くなと指示し、速やかに公衆電話を使って市ヶ谷（陸幕）に電話して、「ロサンゼルスには行けていないが、バンクーバーには全員無事に到着しました」と連絡しました。最終的には、三日間かけて交渉して、特別に陸上自衛隊の一行にだけ国境を開けてくれました。これは、アメリカ陸軍の強力な支援、シアトルとバンクーバーの日本総領事館、外務省、米軍当局のおかげでした。予定通り、実弾訓練はすべて終わりました。東海岸ではテロが起きているのにもかかわらず、西海岸では普通に訓練をさせてくれるアメリカの懐の深さに感銘を受けました。また、こちらの写真にあるナショナルトレーニングセンターという別の訓練場にも行きました。センターの岩に、米軍のマークが刻まれていました。また、アメリカ陸軍の訓練所はとても広く、こういう所を戦車なんか縦横無尽に走っています。このような経験から、アメリカの懐の深さと日本との違いを感じました。これが2001年に2番目に遭遇した大事件です。

2001年の同時多発テロ事件後に、もう一度アメリカの国防大学に留学をしました。その後は、怒涛の勢いで部隊と市ヶ谷を行ったり来たりしますが、その間、東部方面総監部の副長や中央即応集団副司令官等を経験して、その後に起こったのが東日本大震災でした。これは、戦後日本最大の危機だと思いまし

た。これが9.11から10年後の3度目の体験です。

皆さんも、東日本大地震の頃には、物心もついて、テレビで見たり、あるいは自分が実際に体験されている方もいると思うので、そのことを思い出しながら、この話を聞いてください。

これは、防衛省市ヶ谷の建物ですけれども、このA棟の14階、上から数えて四つめくらいの部屋にいました。当時は防衛計画部長ということで、統幕の防衛計画や日米共同の責任者をやっていました。3月11日午後2時46分、この日は金曜日でした。この頃、自衛隊では、3月下旬に定期人事異動がありました。この日は、防衛計画部の送別会を予定していました。金曜日でもあり、みんなウキウキしていました。課業が終わると宴会だ、みたいな感じで。また、ちょうどこの時、防衛省改革というテーマで議論をしていました。それが終わった後に、部長室に帰って、スタッフを呼んでミーティングをしていました。するといきなり揺れ始めて、揺れが止まりませんでした。だんだん揺れが激しくなり、書棚などから本が落ちてくるため、危険を感じ、それを抑えたりもしました。3分間ぐらい揺れたのか、かなり大きな地震が、近くではないけれども、遠くで起こったというも自分の経験から直感しました。これはちょっと、ただならない事態のレベルだと思いました。防衛省自衛隊の作戦指揮所が地下にあるのですが、エレベーターが止まっているので、階段で降りて行くときも、壁にぶつかりながらで、まだ揺れていました。降りると作戦室に画面が写されていました。席に着いて20～30分後に、このような画面が出ました。この画面は仙台空港です。滑走路の端っこまで津波がもう来ていました。私は若い頃に仙台の霞目飛行場でヘリのパイロットをしていたので、土地勘があります。ひょっとして、仙台空港同様に霞目飛行場も津波に襲われているのではないかと危惧していました。津波で飛行場がやれてしまうとヘリが飛び立てなくなると思いました。でも、感心したのは実際にヘリ映像伝送という中継装置が飛んでいるわけです。彼らは地震直後に真っ先に飛んでくれたのだと思います。そういう感覚でこれを見ながら、ただならない事態だなと思いました。

この方が折木良一統合幕僚長で、自衛隊トップの方です。折木統幕長が座っ

ていて、前を囲むようにして副長、部長クラスも座っていました。折木さんはこれ（スクリーン）を見ていました。我々幕僚は、指揮官である折木さんを凝視しているんですね。武者震いしている感じで。そしたら、折木統幕長が、「よしやるぞ」と太い声でおっしゃいました。富士山のように動じず、「やるぞ」と一言。それで皆も我に返って、震災対処が始まるわけです。福島原発には10メートル越えの津波が襲い、雪崩れ込む津波で建屋水浸しになり、地下の発電も止まってしまいました。

震災から2日後の3月13日に米軍はトモダチ作戦を開始します。これはフィールド（Burton M. Field）さんという方で、横田にある在日米軍司令部の司令官であり、日本の米軍を代表する方です。この方を中心に非常に協力してくれました。翌日、北澤俊美防衛大臣が、この方、東北方面総監、つまり、東北エリアの陸上自衛隊の指揮官だった君塚栄治陸将に、統合任務部隊指揮官を命じました。この方は、後に陸幕長となりますが、陸幕長を終わられてすぐに突然亡くなってしまいます。震災の心労が後から出てきたのか、入院して一週間くらいで突然亡くなられ、我々も驚き、葬儀に行きました。そういった立派な方が、指揮官に就いていました。

その頃何が起こっていたかという、12日に一号炉が爆発し、14日に三号炉が爆発しました。実は14日くらいまでは、防衛省自衛隊は、福島原発がどれほどの危機状態になっているかをあまり認識していませんでした。当然ながら、原子力防災計画というのがあり、自衛隊が出ることは決まっているので、放射線防護の特殊な部隊を派遣しました。ただ、自衛隊は原発の敷地内には入らず、敷地内での作業は原発の事業者である東京電力がやることになっていました。原発の外で、住民の避難誘導や放射線測定、モニタリングをおこなうことが、自衛隊の任務でした。しかし、14日に三号炉が爆発した時、第一報として入ったのが「三号炉爆発、中央特殊武器防護隊長以下13名現場にて負傷」との事実でした。我々市ヶ谷本部の認識は、「何でそこにいるんだ？」というものでした。命令では原発の敷地外にいるはずだったのですが、敷地内に入っていたのです。我々も驚いて、福島原発は相当まずい状態になっているのでは

ないかとの感触を持ち、それから福島原発は、防衛省自衛隊の最大の関心事になっていきました。ちなみに、その時、岩熊真司特殊武器防護隊長が、なぜ原発の敷地内に入ったかという、政府の現地対策本部の本部長である政治家から、「頼むから行ってくれ」と言われたそうです。つまり、特殊武器防護隊は、原発敷地外のオペレーションに任務を付与されて現場に駆け付けたところ、対策本部長の政治家が敷地内に行ってくれと依頼した。与えられた任務には、「敷地に入るな」とは書いてないのですが、岩熊隊長は悩んだ結果、自分達以外にできる者がいないということで入っていった。14日は、そういう状況でした。

政府の対応については、今はもうなくなって規制庁になった原子力保安院の対応が本来の役割を十分に果たせず、菅直人首相の補佐をおこなった枝野幸男官房長官と細野豪志総理補佐官は、非常に対応に苦慮されました。自衛隊は、ヘリからの放水や地上から消防車での放水等、一生懸命、現場で動いていました。

そのような中、日米関係の雲行きがだんだん怪しくなってきました。14日頃から、「福島の放射能が危ない、どういう状況なのか」ということで、ルース（John V. Roos）大使が枝野官房長官に再三電話しました。首相官邸に米国政府の連絡員や専門家を派遣することを認めてもらいたいとのことでした。それに対して官房長官は、首相官邸に米軍が入るのは、主権が絡む話ということもあり、お断りするわけです。このような形でルース大使との間に少し疑心暗鬼が生まれはじめていたのではないかと思います。そうなった時に何が一番頼りになったかという、やはり自衛隊と米軍の関係でした。平素から共同訓練や協議をおこないながらしっかりと信頼関係を作っていたのです。

このようにして防衛省で関係省庁も加わって日米の調整を始めましたが、それが総理の耳に入っていませんでした。それで、官邸にしっかりしたものを立ち上げるということになって、ホソノプロセスを作りました。アメリカの方が、細野さんの名前をとって、このように呼び始めました。このホソノプロセスを立ち上げて、3月22日から毎日夜8時に、日米の政府関係者、日本側は細野補佐官と関係省庁の局長、自衛隊からは私が出るという形で協議するようになりました。これが非常に機能しました。やはり、その場で判断できる局長以上

の人たちが集まったことがよかった。特に日本側は、日米で協議する前に、日本側だけで集まって、細野さんが論点を集約して、各省に解決策を提示した上で臨みました。それで上手くいきました。アメリカ側もこの協議体を非常に高く評価しました。

3月24日には、米軍が統合部隊として **Joint Support Force** を横田基地に設置しました。大体峠を越えたのが4月4日、震災から約1ヶ月弱経った頃でした。北澤防衛大臣が、米軍に対して感謝の気持ちを述べるということで、空母レーガンに日米の軍トップが集まりました。北澤大臣が感謝の言葉を述べ、ルース大使がご苦労さんと言うわけですよ。この時、私は現場にいましたが、すごく感動的な場面でした。いわゆるトモダチ作戦が、信頼感に基づいて上手くいったと。途中は色々ギクシャクしましたが、最終的に日米の信頼関係をしっかりと築くことができました。

震災については、民間事故調、政府、国会が報告書を出しました。しかし、日米同盟のところにはあまり触れていません。私は、トモダチ作戦の関係者の記憶も次第に忘却の彼方に埋もれてしまうのではないかと退職してから思い始めました。なぜトモダチ作戦が重要か、日米がいかに連携を強化したか、将来どんな課題があるのかということ进行を明らかにして、記録に残しておくことが自分に与えられた使命のように思い始めました。幸い、2017年から2年間、ハーバード大学アジアセンター上席研究員の機会を与えられました。その間、私は、マレン（Mike Glenn Mullen）統合参謀本部議長やルース大使等の米国側関係者を含めた日米両政府や軍関係者にインタビューし、研究を進めた上で『トモダチ作戦の最前線：福島原発事故に見る日米同盟連携の教訓』を上梓しました。（※同著は、2019年11月に第5回日本防衛学会猪木正道賞を受賞しました。学生時代の校長が尊敬する猪木正道先生でしたので、猪木先生のお名前を冠した賞をいただいた時は感慨深いものがありました。）

今年は震災から10周年となり、アジア・パシフィック・イニシアティブの船橋洋一理事長がもう一度民間事故調を立ち上げると言うことで、私は『福島原発事故10年検証委員会 民間事故調最終報告書』の第六章（「ファーストリ

スポンダーと米軍の支援リスポンダー」)を担当執筆させていただきました。

私は、以上のように、自衛隊在任期間中に3回大きな経験をしましたが、これらは全部、日米関係に絡んでいました。1回目は、外務省で湾岸危機を経験し、対米支援チームを作り、その後、自衛隊に戻りPKOに参加しました。2回目は、2001年の同時多発テロでした。太平洋上でテロ事件に遭遇して、共同訓練の強化を図りました。3回目は、2011年に統幕で、東日本大震災という国家の危機に直面しました。日米同盟の重要性を改めて認識し、2015年の日米防衛協力の指針の改定につなげました。

### <セッション3：日本の安全保障>

日本の置かれた地政学的な特性は、真ん中は東京ですよね。最近よく聞く第一列島線は、千島列島から日本列島、そして南西諸島、沖縄、台湾からフィリピンに連なるものです。まさにこれが大陸の防波堤みたいになっているのです。大陸から見ると邪魔な存在で、それがあるので太平洋に上手く進出できない。日本や台湾、フィリピンを通らないといけない、というようになっています。

歴史的に見ると、江戸末期に、日本に最初に来たのはペリー(Matthew C. Perry)だと思う人が多いのですが、実は違うんですよ。帝政ロシアの時代に、北からプチャーチン(Evfimii V. Putyatin)やレザノフ(Nikolai P. Rezanov)も来たわけです。ロシアは、日本との通商やシベリア開発を目的に来たのですが、江戸幕府がはねつけました。次に来たのが、強力な艦隊を伴ってきたペリーです。数ヶ月の差でした。ペリーは、シンガポール、中国を経由し、沖縄に寄港してから浦賀にやってきました。

近代に入り日本の地政学的な特色を見ると、明治時代の仮想敵国は清国次いで帝政ロシアで、朝鮮半島や北方が正面でした。大正に入ると大正デモクラシーと言われるように、帝政ロシアが瓦解した後の一時期、平和が到来し、日本も軍縮をしました。しかし、昭和に入ると陸軍は満州での対立もあり、ソ連を潜在的な脅威と考えました。一方で海軍は、アメリカ艦隊が一番の脅威だった。つまり、ここで陸軍と海軍の脅威認識が割れてしまいました。このように認識

が割れたまま、太平洋戦争に入っていったのが大きな失敗でした。

戦後の冷戦期は、再びソ連が強くなり、北方重視になりました。現在の戦略環境はどうかかという、当然ながら北方領土も厳しい、ロシアはどんどん兵器を北方領土に入れています。北朝鮮はミサイル、核開発を進めています。中国は南シナ海のみならず、尖閣に対して圧力をかけています。江戸末期から現在を振り返ると、三正面全部、つまり、北、朝鮮半島正面、南西方面の全てが厳しいのは今が初めてのことです。そのような危機意識が日本にはないのが、非常に残念というか心配です。今後の課題は、このように北・朝鮮半島・南に伝統的な脅威が存在することです。それに加えて、宇宙とサイバーの脅威がありますし、また、気候変動や大規模台風が発生しやすくなっている上に、南海トラフ地震など課題だらけです。これに対してどのように対応していくのかということを考える必要があります。戦後 76 年が経過して、その間経済成長に邁進し、置き去りにしてきた安全保障上の課題が今、表面化しています。これに如何に取り組むかということ、皆さんに本当に一生懸命考えてもらいたいと思います。

### <質疑応答>

Q：国民レベルの議論を喚起すべきと主張されていらっしゃるんですが、学生に考えて欲しいことは、どのようなことですか？

A：日本はある意味茹でガエル状態になっていると思います。北朝鮮のミサイルに対しても、最初の方は大変だとされていたのに、次第にまた打ったとなり、政府は「断固反対する」と言うだけで何もしない。このような状態がずっと続いています。相手の脅威がどんどん高まっているのに、日本は口先だけで「断固反対する」と言ってるだけで、防衛費はほとんど増えていません。このような状態になっているんです。リアルに現実を直視して下さい、というのが私の気持ちです。中国の軍備増強、それから中国共産党指導部による専横的な国家主義。こういうものがやはり、相当悪影響を起こしています。北朝鮮のミサイル、そして、台湾有事という問題も出て



きています。日本の周りは、一番危ないエリアなんです。それを認識して頂きたい。

Q：日本は課題だらけとのことですが、何が一番課題だと考えていますか。

A：コロナ禍への対応を見てもそうですが、日本は司令塔機能の強化をおこなって、国全体として対応すると言いますが、中身はほとんど変わりません。結局、どの国の政府もある程度そうかもしれないませんが、各省庁が持っている権限の範囲でおこなうと、縦割りになってしまいます。一番の問題は、今の時代、サイバーや宇宙、電子戦をおこなう場合、どの省庁が所掌するのかよくわからない状態が出てきます。それと同時に、各省庁にまたがる課題が沢山出てきているんですね。そうすると、今の縦割りの行政分担管理原則に従えば、それぞれの所掌に与えられたことはおこないますが、書いてないことはおこなわないということになります。そこに大きな問題があるんです。それは政治家がやるべき、指示を出すべきことなのですが、政治家がそのような認識を持っていないところに問題があります。片や、中国の習近平は、自分で判断したら法律を全部変えられるほどの権限を持っています。ですから、向こうはどんどん新しくなります。人民解放軍も昔は陸軍中心の老朽化した装備だったのが、今や海・空軍中心の近代的な統合の軍隊になっています。この20年くらいで。我々はどうかというと、政府の形はほとんど変わっていない。これが大きな問題だと思っています。

Q：現在の日本の状況は、北から南まで全て厳しい状況だということが分かりました。正しく危機感を持つにはどのようにすればよいでしょうか？

A：私も SNS を使っておりまして、エビデンスに基づいたものは信頼出来ませんが、結構著名な方でも感覚でものを書く方がいらっしゃいます。そういう方のツイッターをフォローしていると、それが真実だと感じられるようになります。つまり、SNS で情報を取っているつもりが、その限られた情報の中で判断するようになってしまうのです。

要するに、何が大事かという、発信源が大事です。ある発言について誰かから聞くと、当然、その人のバイアスがかかります。ですから、自分でそのエビデンスを確かめる、例えば、ホワイトハウスの声明、国防省のニュースリリース、こういうものを見て判断すべきなんです。中国の話もそうですよ。習近平の演説をしっかりと聞いた上で、その言葉をひとつひとつ丹念に見てどうなのかと判断すべきです。ここまで行かないと実はだめなので、SNS だけだと危ないです。今、アメリカの世論がこのように分断されているのも、やはりそういった影響があると思います。トランプ (Donald J. Trump) 信奉者と反トランプという感じで分かれていますから。これはやはり怖いんです。国民融和になりませんから。

Q：磯部先生は、主体的に日本の安全保障戦略・防衛戦略を再構築する必要性、特に、拡大抑止や専守防衛などに関する本質的なタブーなき議論を深める必要があるとの主張をなさっておられます。これら（拡大抑止や専守防衛といった考え方）について、ご自身は、どのようにお考えでいらっしゃいますでしょうか。また、学生がこのような問題を考える上でのヒントがあれば、ご教示頂けますと幸いです。

A：今まで通説だと思われていたことが実はそうではなかったということなんです。例えば専守防衛、これは 60 年前に、国会答弁でだんだん固まってきたものです。その当時、中国の GDP は、日本の 100 分の 1 くらいで軍事力も全く脅威ではありませんでした。北朝鮮も全然脅威ではなく、南北でいざこざを起しているくらいでした。そのような時代に作った概念なのですが、今とは全然状況が違います。今は、周りの国が軍備増強をおこなって、日本の防衛力の比率が相対的に悪くなっている。ですから、専守防衛を金科玉条のごとく守っていると、日本自体を守れなくなるというのが私の考えです。

占領時、日本が再び軍事大国化したら危険ですから、アメリカは徹底して日本の非軍事化をおこなった訳です。しかし、今は日本自身で憲法を変

えられるわけですよ。自らの意思で、日本の憲法はもう時代遅れだと思えば変えられます。それができないところが非常に歯がゆくて。ですから、主体的に物事を考えなければいけません。アメリカに何でも頼るみたいな考えではなくて。尖閣の防衛でも、「安保五条を適用してくれてありがとうございます」、ではないでしょう。尖閣ぐらい、あの島ぐらい、日本の自衛隊で守れなくてどうするんだと、そういう風にならなれないと日本は変えられないと思います。ですから、戦後ずっと支配してきた固定観念を、やはり打ち破らないといけないのだと思います。

Q：尖閣問題に解決策はありますか。

A：これは軍隊、軍事だけの話ではありません。法律戦もあります。いわゆる法執行機関、日本でいえば海上保安庁や警察、自衛隊が全て一緒になって取り組まないといけません。向こうはそのような対応ができますから。世論戦、情報戦、心理戦をおこない、そして実際の軍隊を出します。なおかつ法執行機関かどうか分からない、いわゆる武装漁民みたいな人たちもいますからね。例えば、武装漁民が尖閣に船が難破したと言って入ってきたら、軍隊かどうか分かりませんから、最初は警察が行くじゃないですか。相手が武器を持っていたら自衛隊が対応しますが、やはり相手の権限の行使の仕方や軍の役割等をしっかり研究して、追隨していく必要があります。先取りする方が良いんですけど、日本ではなかなかそう行きませんので、よく相手を研究して、日本の法的な欠陥を是正していかないといいけません。今、政府は警察・消防の実力をつけようとしています、それは正しいことだと思います。それで、今度は、警察・消防と自衛隊の活動の接続を、公的にどのように整備していくのかという点が非常に大事ななと思います。ですから、軍隊だけの話ではないのです。

Q：『軍事研究』2021年10月号巻頭言（「20年前の『9・11』」）において、米軍のアフガン撤退の事例を受けた、8月のバイデン大統領演説より読み取

れる内容の一つに、「米軍は自国のために戦う意志のない軍隊のために戦うことも命を懸けることもない、とのメッセージ」を挙げられています。ご自身が米軍と関わられる中で、そのような思いを直に感じた出来事はございましたでしょうか？

A：実体験で言うと、東日本大地震時のトモダチ作戦は、美辞美談だけではないんです。本には書いていることですが、事実として、アメリカの空母レーガン等は、震災当初、サッと集まってくれました。仙台沖や宮城沖に、救援物資を運んでくれた。ところが放射線が漏れているとなった瞬間に、アメリカ海軍の艦艇はあっという間にいなくなりました。それは、艦隊の、特に原子力推進の空母は、放射線があるとすると、自らの原子炉から出てるのか、外から来てるのか分からなくなるじゃないですか。だからぱっと引いていったんです。

これは当たり前のお話なのですが、そこで思ったことの一つ目は、「同盟国、同盟軍は、助けに来てはくれる、しかし、最後に運命は共にしない。」これはもう間違いのないことです。第二次世界大戦中に、フランスのド・ゴール（Charles de Gaulle）が言った言葉だと言われていますが、まさにそうだと思います。他方、二つ目に思ったことは、米軍と自衛隊の信頼関係はものすごく強い、これも間違いのないことです。このことは、米軍と付き合いしている時に、つくづくそう思いました。彼らは命をかけて助けに来てくれると思っています。その根底にある理由は、やはり日本の自衛隊が強いからだと思っています。誰も弱い軍隊と一緒に戦いたくないですから。それを証明しているのが、日米同盟でおこなわれる共同訓練です。自衛隊がそれだけの実力を彼らに見せていて、他の同盟国も色々ありますが、常にナンバーワンです。そのような信頼関係があるので、米軍人はものすごく自衛隊を尊敬しているし、我々も米軍を尊敬しています。ですから、後は政治指導者間の信頼関係があれば大丈夫です。ただ、政治は、他国の国益も絡んでくるので、なかなか難しいのですが。

Q：ご高著（『トモダチ作戦の最前線』）では、自衛隊と米軍の間のネットワークや信頼の重要性について論じておられます。磯部様が自衛隊にいらした時期（1980年～2015年）を通じて、自衛隊と米軍間の信頼関係は漸進的に強化されたとお考えでしょうか。それとも、信頼関係が強まった時期、弱まった時期が混在していたとお考えでしょうか。

A：基本的に現場レベル、共同訓練のレベルで言えば、共同訓練を始めた頃から信頼はずっと続いていると思います。初期の自衛隊は、米軍に比べたらヒヨコみたいなものだったと思います。しかし、どんどん成長しているので、その点はもう問題ありません。しかし、軍の上層部になると、政治に影響されます。日米関係も政治に影響されます。例えば、レーガン（Ronald W. Reagan）大統領と中曽根総理の時はとても良い関係でしたが、カーター（Jimmy Carter）さんの時はむずかしかったとか。色々要素があるので難しいですが、例えば、中国に対する話もそうです。アメリカはかつてエンゲージメント政策という関与政策をとりました。これは、キッシンジャー（Henry A. Kissinger）訪中辺りからの政策ですが、中国を自由主義の世界に引き入れると、中国共産党は自ずと変わっていき、西側諸国と同じような自由と民主主義を尊重する国になってくれるだろうと思って、期待感を持って引き入れた。国交を回復し、WTOにも入る。こういうことをしました。しかし、いくらやっても変化がなく、一党独裁のままです。それを受けて、トランプ時代からエンゲージメントをやめ、競争の時代に入るとされています。エンゲージメントの時代においては、日米の軍の間でも対中脅威感は大分違ったという時期もありました。

Q：共同訓練の話が出てきましたが、アメリカの訓練場は日本とどのようなところが違うのでしょうか？日本でできないような訓練とはどのようなものなのでしょうか？

A：先ほど少し話しましたが、ミサイルやロケットはどんどん精度が良くなり、射程が延びています。日本で一番広い演習場は、北海道の根室や釧路の北

にある矢臼別演習場なのですが、広さは東西で言えば12キロぐらい、南北で言えば4キロぐらいです。これでも十分広い演習場なのですが、ロケットやミサイルを最大射程で打つと飛び越えていってしまいます。その短い射程で訓練ばかりおこなっていると、実戦になった時に本当に長い射程で撃てるかどうか自信がつかねます。訓練でおこっていないことは、本番ではうまくいかないのです。ですので、我々は、最大射程で撃てるアメリカの演習場に行って、自分達が持っている装備品を最大限で撃ってみて支障がないということ、体で感じなければなりません。そういうことをおこなうために、アメリカに行って訓練しています。

Q：自衛隊と米軍の共同訓練や計画検討を促進し、相互運用性や実効性の向上を通じて日米同盟を一層強化すべきであるとの主張をなさっておられます。これらに関し、具体的にはどのように進めていけばよいとお考えでしょうか？

A：課題は沢山ありますけれども、今はスピードの時代です。情報を貰ったら、瞬時に判断して、それに対応しないといけません。ですので、そのコマンド・アンド・コントロール、コミュニケーション、そういった指揮関係や部隊を統制する関係、情報の共有、相互運用性を高めないといけないと考えています。兵器の相互運用性も、ある程度できますけれども、最初のところの意思決定や情報共有のところはものすごく深めないといけないかと思えますね。

Q：お仕事をする上で大事にしてきたことや心掛けていたことなどはありますか？

A：二つ言わせていただくと、一つは40年近く防衛に携わって、自分は国防や、国の安全に専念できたことです。翻って言えば、結婚して40数年、家のことはほとんど顧みず、申し訳ないと思っています。退職後、よく妻に怒られます。「あの時、何もしてくれなかった」とかね。家族の理解があって、

自分は仕事に専念できたと思います。このように仕事に専念できたことに、本当に感謝しています。

もう一つは、「天の時、地の利、人の和」という言葉がありますよね。「天の時」というのは、いわゆるタイミング、時間的な要素を味方に付けないとだめだということです。次に、「地の利」というのは、特に陸上自衛隊は、地の利がないといけません。敵の方に晒して陣地を作ると敵の弾にあたってみんな死んじゃいますからね。そのような地形的な要素、空間的な要素を味方につける必要があるということです。三つ目は、「人の和」、つまり、チームワークです。指揮官が一人で「行くぞ」と言っても、この指揮官がみんなに嫌われていたら、行ってみたら自分しかないということになりかねません。そういう状態じゃダメなんです。やはり心を一つにするにはどうしたらいいかということを一瞬懸命考える必要があります。ですから、私は天地人という言葉が好きなのですが、「天の時」、タイミングをはかる、今だっていうときを掴む。そして、「地の利」、その空間を味方につけて、「人の和」、チームワークで対応するという、三要素を集めるということが、訓練や演習において非常に役に立ちました。

Q：なぜ陸上自衛隊を選んだのでしょうか。また、陸上自衛隊で大変だった事や、やりがいはどのようなものだったのでしょうか。

A：実は、私の父親は旧海軍、海上自衛隊におりましたので、防大に入るまでは海上自衛隊しか見ておらず、海上自衛隊に行くものと思っていました。しかし、防大生活の中で、様々な指導教官の話を聞き、「陸が良いと言われているけれど、どうだろうか」と父親に相談したところ、「陸は所帯も大きいし、活躍の場が多岐にわたっているのでもいいのではないかと助言してくれ、2学年になる時に陸上要員になることを決めました。

陸上自衛隊というのは懐が深く、温かい組織だと思います。陸上自衛隊は、まさに熱い思いの人たちで成り立っています。この熱い思いを共感、共鳴したいという方は、自衛隊、特に陸上自衛隊に応募されることを期待

体験的安全保障論（講演会記録）

しています。

本日は板山先生のご紹介によりお招きいただき誠にありがとうございました。

追記：本講演録作成に当たり、板山ゼミ（専門ゼミナールⅠ）の皆さんにお手伝い頂きました。記して感謝申し上げます。

